

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 21 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00607

研究課題名(和文) 注釈・論議資料の用字法と文章構造に着目した仏教漢文書記史の研究

研究課題名(英文) A Study of Bukkyo Kanbun: Elucidation of the Writing system by analysis of characters and sentences

研究代表者

磯貝 淳一 (ISOGAI, Junichi)

新潟大学・人文社会科学系・教授

研究者番号：40390257

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：平安時代後期から鎌倉時代における日本撰述の仏教漢文について、原本調査に基づく文体特徴の解明を行った。とくに、談義聞書である『打聞集』について、和化漢文体を用いる教釈的文脈と漢字片仮名交じり文体を用いる説話的文脈が見られることに基づき、文章内容と表記様式・文体とが相関を見せる言語的位相の実態を明らかにした。また、説話の和化漢文において、古辞書に見られない訓が加点される実態を記述し、古記録類とは文章の目的、利用のあり方が異なる説話と化漢文の言語の特徴を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の特色は、これまで日本語史料としての実態が明らかにされてこなかった資料群を対象としていること、文章内容による分類が加えられることの多い和化漢文について、言語活動の実態と言語事象の相関性を明らかにすることで、文体範疇を再構築しようとするところにある。本研究によって、仏家が直接間接に関わった文章について、その成立の背景や周辺諸文体との関連性を解明するための新たな視点を提示することが可能となる。本研究を踏まえた上で仏家の範疇を越えた周辺資料との比較研究を行うことにより、仏教漢文が日本語書記の歴史に与えた直接間接の影響関係について、より明確に捉えることが可能になると考える。

研究成果の概要(英文)：Uchigiki-shu(Kosanji Temple Collection) is a documents of Dangi-kikigaki, There are two different writing styles mixed together. It is a mixture of Wakakanbun and Kanji-Katakana-majiribun. Linguistic differences correspond to content differences, that is, explanation of Buddhist doctrine corresponds to Wakakanbun, and Buddhist narrative corresponds to Kanji-Katakana mixed writing. Furthermore, the investigation of Bukkyo-setsuwa (Cyu-ko-sen), revealed that the relationship between Kanji and Kun was different from other Wakakanbun.

研究分野：日本語学

キーワード：日本語史 和化漢文 変体漢文 仏教漢文 文体史 書記史 書記言語 和漢混淆文

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

[学術的背景 1 和化漢文研究における未活用資料群 (仏教漢文) の存在]

本研究で行う日本語史の解明において対象とする仏教漢文は、上代から近代に至るまで、日本語の書記様式の一つとして様々なジャンルの文章に用いられた和化漢文 / 変体漢文の一文体範疇であり、とくに僧侶およびその周辺の文章作成者の漢字文による言語活動の所産を指す称である。従来の和化漢文研究は、平安・鎌倉期の古記録、すなわち公家日記の文体特徴の解明を中心に進められ、そこで得られた成果が和化漢文の典型と見做され、和化漢文全体に敷衍されることが多かった。和化漢文全体の中には様々な要因をもって成る文章が混在しており、それらは作成目的・作成者・様式等の観点によって分類しうる位相的な差異を有している。従来研究の中心におかれてきた公家の文章とは異なる仏家の漢文には質量ともに膨大な蓄積があり、日本語書記史を明らかにする上で、これら資料群の実態解明は不可欠となる。しかし、未公刊の状態にある文献の多さや、原本閲覧の困難さ、仏教の教義に関わる文章内容理解の難しさなどが障壁となっており、仏教漢文の日本語史研究への活用は、潜在的な資料の規模に対して進んでいない。特に、文章作成の目的に対応した言語資料の位相性の解明や、言語事象に基づく文体範疇の再構築は、日本語書記史研究において、今後に解決すべき事柄を多く残す研究領域の一つとなっている。

[学術的背景 2 言語的観点に基づく文体範疇再構築の必要性]

和化漢文がその下に種々異なる文体範疇を持つことは、先学も多く説くところである。しかし、言語資料としての和化漢文体の全体を説明した研究、言語の位相性とその背景を説明した研究は未だ存在しない。研究対象とする資料群の偏りがあることに加え、「文体」を説明する要素として表記・文法・語彙といった諸要素が個別に存在するものの、文章全体を検討しうる分析単位が不在であることが大きいと言える。その結果、和化漢文 (仏教漢文) の文体範疇は、文章内容を中心に分類が行われ、言語の実態が見える形にはなっていない。本研究では、文章の成立状況や文章作成の目的と用字・用語および文章構造の違いとの間にある相関性を明らかにすることで、この問題の解決に近づこうとするものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、平安時代後期から鎌倉時代における日本撰述の仏教漢文の文体特徴の解明である。当該期の仏家の学問活動における漢文書記の実態、すなわち仏家における書記言語と書記様式の相関の整理を行い、仏教漢文内部にみられる文体の位相を明らかにする。そのために、「注釈書類」と「法会における論義の記録資料」の異なる言語活動に基づく資料を選定する。用字・用語等の記述と文章構造の把握とを分析軸として、当該期の仏家の学問的活動における漢文書記の実態の解明を進める。

3. 研究の方法

本研究は、「注釈・論義資料群の基礎的調査」から「仏教漢文資料の文体範疇の再構築」へと研究を進展させる。具体的な研究課題として、1. 資料の原本調査、2. 調査資料の電子データ化とデータベース作成、3. 仏教漢文の文体特徴の記述と三つの柱を立てた。対象とする資料は、教義の注釈に関わる文章、法会における論義の記録、さらに、それら僧侶の言語活動に関連する説話資料等である。

本研究期間では、覚鑿 (1095-1143) の関連資料について、高山寺 (京都) に所蔵される資料を中心とした原本調査を行い、漢字使用の実態を記述する。各種目録における資料の伝存・書写状況から、調査対象を選定し、両者の注釈活動の実態把握と言語的特徴の解明を目指す。また、僧侶の学問的活動の周辺にある資料として、説話資料の言語の実態把握を行う。具体的には、平安末期から鎌倉期にかけて成立した『注好選』(東寺観智院蔵本)、『探要法花験記』(醍醐寺蔵本) を中心に、言語事象・文体特徴の把握を行う。

原本調査を進める文献については、翻字本文作成・訓読文作成・使用漢字の情報付きデータベース構築を行う。これによって、仏教漢文内部における漢字使用の共通性や差異性の抽出と言語事象に基づく文体範疇の再構築が可能となる。本研究全体では、仏家の学問活動に関わる文章群における、成立状況・文章書記の目的の違いと、用字・用語や文章構造の違いとの間にある相関性を明らかにする。

4. 研究成果

(1) 注釈・論義関係資料の原本調査、データ整備

高山寺蔵『打聞集』三帖(鎌倉時代初期写)は、覺鑿が行った十住心論談義をはじめとする各種談義の集成(聞書)である。その文章は、漢字表記を主として、所々小字の片仮名で活用語尾、助詞・助動詞を記す宣命体に近い表記様式をとっており、僅かに混じる自立語を片仮名で記す例には口語的要素を持つ語の使用も認められる。また、問答体を交えつつ、一部に「付云」「難云」等、講経論義に見える形式を交えて語られた談義の姿が記録されていること、多くの仏教説話を含むことから、論義書類をも含む仏教記録資料の文章・文体研究にも資するところが大きい資料である。しかし、高山寺本は全帖に亘って破損が著しく、本文の欠失や一部錯簡も存することから、判読に困難を生ずる箇所も多く、その価値に比して研究が進んでいない状況がある。そこで、基礎的調査として、本資料の翻刻を進め、同時にテキストデータの整備を行った。本研究期間では、書誌事項の調査及びデータ入力・データの再確認を完了した。このうち、第一帖の翻刻を完了し論文発表の形で公開した。

(2) 注釈・論義関係資料の文体特徴の把握

高山寺蔵『打聞集』は、その大部分が和化漢文で記されているものの、一部に宣命体に近い片仮名交じり文を含んでおり、僧侶の教学に関わる言語活動の実態を反映する資料として、また和化漢文と片仮名交じり文とが混在する資料としての価値を有する。本研究期間では、『打聞集』に見える仮名表記自立語の全例を抽出し、当該期の言語の反映と認められる言語事象の指摘に加え、本資料が表記様式の違いに対応する言語的位相を含むことについて、以下の諸点を明らかにした。

本資料は特定の人物に関わる談義の記録としての一貫性を持つ一方で、各段義の内容によって教釈的文脈と説話的文脈とが混在するテキストであり、仮名表記自立語の多くは説話的文脈に現れている。

仮名表記自立語には、口語的な要素としての音便、係り結び、和文語的な呼応、口語・和文語的な語の使用が認められる。用例数が僅少ではあるものの、こうした諸要素は談義の場における言語の実態の表出である可能性がある。

上述と関わって、教釈的文脈は和化漢文的要素を持つ漢字文の表記様式、説話的文脈は漢字片仮名交じり文の表記様式というように、文章内容と表記様式・文体とが関連づく文体的位相性を内包するテキストを形成している。

その一方で、談義の記録としての言語共通基盤を想定しうる接続詞の使用が認められる。「サテ」「サレバ」等、所謂「サ系」の接続詞は、漢文訓読語的な「シカ系」の接続詞に対して、和文語的性格を持つものであるが、『打聞集』では、先に見た教釈的文脈、説話的文脈双方に共通して用いられている。説話的文脈では、時間軸に沿って進む話題の展開部において、教釈的文脈では、「次第」を説く解説的文脈において、ともに前の話題を受けつつ関連のある新たな話題に転換させる用法での使用が認められた。

(3) 説話資料の文体特徴の把握

『探要法花験記』における文末助字「也」の和化

醍醐寺蔵『探要法花験記』(久寿二・1155年源西撰、嘉禎三・1237~四・1238年写)は、日本と中国の説話がほぼ交互に排列される法華経靈験譚の集成である。本資料(中国の部)の出典として、東大寺図書館蔵『法華経伝記』(唐、僧祥撰、大治五・1130年写)がある。磯貝(2010)('醍醐寺蔵『探要法花験記』における「也」の用字意識 出典との比較に見る漢文和化の問題')『古典語研究の焦点』武蔵野書院、所収)では、両資料の共通話42話を対象として、中国漢文から和化漢文が撰述される過程で生じた、添加・削除・改変の実態を記述する中で、「也」が『探要法花験記』において、添加の傾向があることを指摘している(添加71例、削除1例)。これを受けて、「也」が『探要法花験記』において果たす機能を詳細に検討し、それが漢文の和化においてどのような意味を持つのかを明らかにした。

説話の展開部に使用される助字「也」/結末部で使用される助字「矣」は、一文の範囲を超えて文章中のまとまりにおいて現れるテキスト機能を持つと考えられる。

説話の構成要素としての話題をまとめる機能を持つ「也」は、話題を展開させる接続語と共に説話テキストを構造化する。

助字「也」のこうした機能は、目的・場を異にする他の和化漢文には見られない場合がある。

和化漢文の分類指標となり得る事象と認められる。

助字および接続語の添加に見る「和化」は、情報を構造化して蓄蔵する性格を持つ「書記言語の史的展開」と関わっている。

『注好選』の用字と訓との関係について

平安時代末期に成立した和化漢文の説話集、東寺観智院蔵『注好選』の用字の特徴解明の一環として、使用漢字とそれに対する付訓の関係の一端を明らかにした。『注好選』では、古辞書(色葉字類抄・類聚名義抄)に認められない漢字と訓の関係によって訓が施される場合、単字で理解する場合には離れた読みを示す全訓付訓が行われていた。そうした加点が成された箇所について、古辞書等に無い謂わば一回的な訓を与えることの意味は、「童蒙教訓的」「初学者向けの教

科書的」な目的で編纂、利用されたと思しき本書収載説話の文意、ひいてはそこから導かれる教えをより強く響かせようとする解釈行為が存在する可能性を指摘した。中国古典に素材を求める、中国古典文の言語・用字の影響を強く受ける和化漢文説話資料においては、漢文表記を採る限り、日常的対話的な口頭言語とは離れた語彙・文法を用いざるを得ない「縛り」がつきまとうこととなる。当該期の古辞書に認められない漢字と訓との結びつきの創出（一回的な使用）は、漢文の表記様式による「記録の書記言語」を対話的な口頭言語へと移し替える言語行為の跡と見ることができる可能性についても言及した。

『後二条師通記』本記・別記の文体差と和化漢文の書記言語の特質

本研究課題は、仏家の和化漢文を対象とするものであるが、「和化」の問題を和化漢文全体において捉える立場から、言語的な分析を行う観点の抽出を目指し、古記録の文体についての検討を行った。

『後二条師通記』は関白藤原師通（1062-1099）の日記（古記録）である。本資料には、冒頭3カ年（永保三年～応徳二年）分に、所謂「本記」「別記」と呼ばれる2種のテキスト存在している。他の古記録の場合とは異なり、本資料の本記・別記は、一日の条文のほぼ同内容が、異なる言語表現となっているところに特徴がある。両者の同一文脈の比較から、以下のような差異を明らかにした。

「本記」の特徴

- A 中心的出来事による一日のラベリング（条文全体の出来事に中心構造を与える）
- B 「われ（予・余）」の表出（事態の関係把握の明確化）

「別記」の特徴

- C 時系列による記録（出来事を中心構造を持たない文章）
- D 因果関係を示さない接続語の使用（時系列に基づく文章展開）

本記・別記の特徴を示すA～Eの観点は、記主が伝え残すという文章作成目的に照らせば、当該日の中心的出来事・事柄を記録するための情報の構造化の有り様であり、それぞれが本記の側により「整えられた」文章としての印象を与えるものとなっている。本記は情報の構造化がより明確に認められる分、文脈を共有しない第三者にも理解可能となる書記言語の特質をより強く示しており、別記は構造化が本記ほどには認められず、記録としてはより当座的・備忘的な性格が強いものとなっているといえる。

情報の構造化を観点として、書記言語の特質が和化漢文のテキストに現れる実態の整理を行った。この検討を通じて、先行研究では使用語彙の差異から論じられてきた『後二条師通記』本記・別記の違い（本記の側に漢文的性格がより強く表れる点）について、「書記」（情報の構造化）のレベルからの意味づけを行う可能性を提示した。こうした観点を設定することの意義は、ジャンル等の外的区分に因って行われてきた和化漢文の文体範疇に関して、異なる場・目的において成立したテキストの言語的差異を描き出すことによって、言語的観点からの再範疇化を可能とする点にあるといえる。また現在、日本語文体史研究は、和文・漢文訓読文・和漢混淆文あるいは平仮名文・漢字文・漢字平仮名交じり文といった各範疇固有の要素を抽出する方法によって進展してきている。その一方で、異なる文体や表記体が相互に交渉しながら展開する日本語文体史を総合的に捉えることは難しい状況にある。しかし、書記言語の特質という各範疇を横断的に分析可能な観点によって日本語書記史を素描することで、各文体範疇の成立やその後の交渉・展開の実態の記述が可能になると考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 磯貝淳一	4. 巻 13
2. 論文標題 『注好選』における左右両訓と和化漢文の用字 説話資料書記の特徴について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 言語の普遍性と個別性	6. 最初と最後の頁 (1)-(15)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 磯貝淳一	4. 巻 R3
2. 論文標題 高山寺蔵『打聞集』翻刻（三）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 令和三年度高山寺典籍文書総合調査団報告論集	6. 最初と最後の頁 81-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 磯貝淳一	4. 巻 32
2. 論文標題 言葉を学ぶ教材としての『伊曾保物語』 国字本・天草版の比べ読みから（令和元年度新潟県ことばの会研究発表要旨）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ことばとくらし	6. 最初と最後の頁 19-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 磯貝淳一	4. 巻 11
2. 論文標題 和化漢文にみる書記言語の特質について 『後二条師通記』本記・別記の文体差から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語の普遍性と個別性	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 磯貝淳一	4. 巻 令和1年度号
2. 論文標題 高山寺蔵『打聞集』翻刻(二)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 令和元年度高山寺典籍文書綜合調査団報告論集	6. 最初と最後の頁 118-122
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件(うち招待講演 1件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 久保祥子, 磯貝淳一
2. 発表標題 『宇治拾遺物語』の「言語」を考える授業実践 日本語書記史の観点による古典の教材化
3. 学会等名 新潟大学人文学部国語国文学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 磯貝淳一
2. 発表標題 和化漢文と日本語書記 『探要法花験記』における文末助字「也」の機能に着目して
3. 学会等名 第5回 日本語・日本文化研究国際学術大会(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 磯貝淳一
2. 発表標題 読まないものをなぜ書くのか 漢字文の日本語書記史研究
3. 学会等名 新潟大学教育学部国語国文学会(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 磯貝淳一
2. 発表標題 「コミュニケーションの言語」を学ぶための古典 『枕草子』を例に
3. 学会等名 中越国語教材を読む会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 磯貝淳一
2. 発表標題 言葉を学ぶ教材としての『伊曾保物語』 国字本・天草版の比べ読みから
3. 学会等名 新潟県ことばの会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤井俊博, 磯貝淳一, 山中延之, 中野直樹, 久田行雄, 山本佐和子, 石井行雄
2. 発表標題 園城寺所蔵訓点資料について 『新版点本書目』補遺として
3. 学会等名 訓点語学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 磯貝淳一
2. 発表標題 東寺観智院蔵注好選の用字について 左右両訓を有する漢字の性格から
3. 学会等名 新潟大学人文学部国語国文学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 磯貝淳一
2. 発表標題 談義聞書テキストの構造と展開 「口語」の表現価値再考
3. 学会等名 新潟大学言語研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 磯貝淳一
2. 発表標題 漢字文の日本語表記史 所謂「助字」と日本語との対応を軸に
3. 学会等名 新潟大学言語研究会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 石塚晴通, 月本雅幸, 松本光隆, 山本真吾, 池田証寿, 徳永良次, 矢田勉, 磯貝淳一, 白井純, 古田恵美子, 土井光祐, 金水敏, 末木文美士, 大槻信, 山中延之	4. 発行年 2020年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 536
3. 書名 高山寺経蔵の形成と伝承	

〔産業財産権〕

〔その他〕

新潟大学 研究者総覧
http://researchers.adm.niigata-u.ac.jp/html/100000729_ja.html

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------